

大通公園を望む窓辺から

コロナ自粛

常任理事 山科 賢児

新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大が始まり、約6カ月が経った。風邪ウイルスの一種であるはずの新型コロナウイルスの感染が世界的流行となり、世界中の人と物の往来は遮断され、グローバル化した世界各国は一転鎖国状態となったのは予想外であった。

欧米諸国の新型コロナ対策は、都市封鎖や外出に罰則を設けたり店舗を閉鎖させる強制措置だが、日本の非常事態宣言は緩やかで独特の「自粛要請」というお願いの形をとった。ところがこの曖昧な非常事態宣言が出されると、日本社会の人と物の動きは「同調圧力」と「相互監視」によって、ほとんどの商業施設も飲食店も休業し街は活気を失った。また仕事は在宅勤務やテレビ会議に変わり、飲み会は外出を自粛しオンラインと、世の中の仕事や生活様式は一変した。

友人とも会えず旅行もできない「自粛生活」は、いずれいつもの日常に戻る。しかし感染対策のための自粛要請は「コロナ感染で死ぬより、コロナ自粛で死ぬ」と同義に近く、休業の責任は当事者となり十分な補償は望めず、街の経済と人々の心が元通りになるかは不確かである。

1920年のスペイン風邪の流行当時はインフルエンザウイルスがまだ発見されておらず、感染の予防は「学校閉鎖や大規模集会の禁止と、感染者の隔離」であり「手洗いや咳エチケットと、密接な空間を避け外出の自粛」となんら今と変わらない。あとはただ、時間が経ちウイルスの感染が収まるのを待つのみであった。

新型コロナウイルス感染症にも今はワクチンも治療薬もない。そのため未知のウイルスによる感染症に不安や恐れを過剰に感じ、感染者やウイルス感染治療に携わる人々に対して嫌悪や差別や偏見を生み出す。感染症が「からだ」の疾病であると同時に「心と社会」の疾病であると認識を新たにした。

ペストやスペイン風邪の世界的流行後は、しばしば世界の社会構造や価値観が変化している。今後、社会が元気を取り戻し新しい姿の世界を生み出すには、医学の力だけでなく人々の連帯と信頼関係をいかに取り戻すかにかかっている。



部屋の片付け

前理事 千石 一雄

定年を間近にし、仕事部屋の片付けを行う日々。15年以上たまつた本、雑誌、書類、意味不明なガラクタやゴミで部屋は占拠されていた。当初は一つ一つに懐かしい思い出がよみがえり、捨てるのが躊躇された。妻に家に持ち帰ってもかまわないと聞くと、即座に断られ、断捨離は心の問題と諭された。パースエーションで作ったスライド、山のようなフロッピー、開く必要のないものばかり。一生懸命書いた論文の別冊。記念として、とっておきたい気持ちはあるが、冷静に考えてみるとこれからの人生に必要なものは何一つないような気がした。

すべての本、雑誌を捨て、書類をシュレッダーにかける毎日。4台のデスクトップコンピューターのうち3台を処分する。ノートパソコンも20年以上のビンテージがつきそうなものを含め3台を処分した。この時はさすがに捨てるのが惜しいと思う自分と葛藤。まだまだ未熟。本棚は空っぽ、机や椅子にうず高く積まれた雑誌や書類は処分され、久々に座面が見えている。当初、言うに言われぬ空虚感、寂寥感のようなものを感じるのかと思っていたが、片付いていくにつれ、逆に晴れ晴れとした、清々しい気持ちで満たされる。

大学を卒業しても就職活動をすることなく、学生気分のまま産婦人科医となって40年以上が過ぎた。何も後悔はないが、成し得たことの少なさに今更ながら愕然とする。人生100年とすれば、もしかしたらこれから何かを成し遂げるかもしれない。残念ながら今のところは何をすべきかまだ見つかっていない。

2020年春、大学をようやく卒業する。これまで背負ってきたものから解き放たれ、社会人としての一歩を踏み出すような心のざわめきを感じる。体力では及ばないが、まだまだ気力と知力では戦えるかもしれないと思うのは単なる思い込みだろう。